

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 金杉武司、塩野直之、高村夏輝編『野矢哲学に挑む 批判と応答』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上田, 知夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001729">https://doi.org/10.57529/0002001729</a>

〔書評〕

金杉武司・塩野直之・高村夏輝編

『野矢哲学に挑む 批判と応答』

上田知夫

大切な他者の哲学を物語を込めて眺める

本書では、野矢がこれまで扱ってきたさまざまな主題のうちから主要な諸テーマ（物語論、知覚、実在性、意味、他者性）として意図についての諸問題<sup>(1)</sup>、および、さらに応用的な主題としての自由や自己知の問題が選ばれ、その各論が比較的独立して論じられている。各論考で扱われるのはどれも、野矢がさまざまな箇所<sup>(2)</sup>で論じている重要なテーマであるが、本書ではそれらのテーマについて、各論者の地点から眺めたものとして、つまり野矢の論考をそれぞれ論者の観点から眺望地図に描き込む営みとして読む<sup>(3)</sup>、とても楽しい。その地図には、野矢の各論がもちろん重要な道標として描き込まれているが、それに尽きない。それぞれの論考に野矢が応答しているが、野矢の応答は、

各論考が自分について書かれているものとして正解であるかどうかを評価するより、野矢自身が大事にしてきた諸テーマについて、議論が前進しているかどうかを検討しているように読める。ここに、この本の重要な価値がある。

本書評では、全ての論題を網羅的に論じる紙幅はないので、野矢による素朴実在論に着目して巻末の野矢論文の理解を試みる。その上で、その観点から各論文を扱うことにする。

野矢によれば素朴実在論は、私たちが「ほとんどの場合『意識』などというものがあると考えはしない」こと、そして目の前の机を私が見ているときに、「ここにはただ机があるだけであり、何か机の知覚イメージとか意識と呼びうるようなものがその机と別立てにあるとは考えられない」という「日常的な実感」を反映したものである<sup>(4)</sup>。このような素朴実在論は、個体が主体から独立していることを前提する。問題は、そのような個体について、私たちは思考することができるのかという問いが発生することである。本書で野矢は、ネーゲルの実在論を検討の上、思考不可能なものの実在に同意する<sup>(5)</sup>。とはいえ、それらについて有意味に語ることも示すこともできない（つまり「信仰」と呼びうる）と論じる<sup>(6)</sup>。評者も思考不可能なものの実在論を擁護したいが、野矢が合わせて引き受ける性質の実在論

は拒否したい。<sup>7</sup>眺望論にしたがえば、私は、あなたと同じ地点に立つとき、実在する対象（東京スカイツリー、机などなど）を同じように見ることができ、これは受け入れたい。一方で評者は、野矢の言う「カント的」な実在観を採用したいと考えており、実在は論理空間の外にのみあると考え、それゆえ性質は実在しないと考えている。私たちは操作的に働きかけることができることができる存在者が実在する。その意味で、性質は私たちの探究のあり方に依存し、それゆえそれらは私たちと独立には実在しないのではなからうか。

では実在する個体は、野矢の議論では、私たちとどのような関係に立つのだろうか。そこで、相貌論が重要になる。山田は、実在の対象と個体との間に差異を見出し、<sup>8</sup>反転図形の例を検討しながら、相貌に中立的な対象を切り出すことができ、その対象は非概念的な内容に対応する性質を持つと考える。<sup>9</sup>これに対して野矢は、「相貌に依拠してのみ対象は同定されるという最初のプロセスまでしか考えておらず、その後その相貌を引きはがすというプロセスの必要性」を認めない。<sup>10</sup>なぜなら、野矢によれば「対象は必ず相貌のもとにある」のであり、<sup>11</sup>他者と共通の相貌を探っていくことで同一の対象の存在を確認することになるからである。<sup>12</sup>

ここで、評者の観点から問題にしたいのが、他者の実在である。私たちの目の前に現れる他者は、個体でもあるからである。他者について、野矢は相互に連関している二つの契機を見てとる。一つは、先ほど述べた共通の相貌を探ろうとする相手としての他者である。もう一つの契機はある人に関心を持つことによつて生じる「他者性」と呼ばれる予感によつて現れる他者である。<sup>13</sup>私にとって他者性を持つて現れる他者は、私にとって、単一の相貌のもとの典型的な物語（あるいはプロトタイプ）をはみ出して生きている。評者は、この二つの契機を人称性によつて区別したいと考えるが、まずは各論者と野矢の対話を確認しよう。

他者と共通の相貌を探ることは、他者の実在を示すためにも言われる。なぜなら、野矢の議論では、他者は、相貌の他者だからである。<sup>14</sup>塩野は野矢の他者論を分析する際に、それぞれの行為者が他者に対して持つ複数の物語のポリフォニーを生きる可能性を指摘しつつ、<sup>15</sup>理解不能な他者との間に一人称単数の私が、共通の相貌を探そうとする問いを必要とするものとして議論する。<sup>16</sup>野矢は、しかし、そちらの方向にはいかない。<sup>17</sup>なぜなら野矢にとっての他者は、出会っても出会わなくても構わないようなそんな個体だからである。そのような他者は、場合

によっては論理の他者である可能性ですらある。<sup>22)</sup> そのような他者について、野矢によれば、思考することはできないが、そのような他者はありうる。これが本書に収録された野矢論文の含意である。

ここで立ち止まって考えたいことは、私ならざる他者をより適切に捉えるためには、私が相互行為する相手であるところの二人称として現れるあなたと、私たちが関心を持って観察し、三人称的に現れる彼らに区別する方が、野矢の探究にとつても適切ではなからうかということである。そう考えるとき、野矢が「他者性」と呼ぶ予感についても、単に端的な三人称的他者に対する他者性と、私にとつてあなたとして現れる可能性を見とる他者性は区別されるべきであろう。そのように区別することで、前述の二つの契機の間関係がより見えやすくなるだろうからである。評者は、一人称複数的な私たちの営みに参与するあなたの問題を重視したい。二人称のあなたとして私に現れる他者の特徴は、その他者に関する典型的な物語がないことである。<sup>23)</sup> 根源的規約主義において想定される通り、言語実践を含む相互行為がなめらかに進行しているときには、「意味や規則が主体化されることもなく、われわれは盲目的に何事かを為すだろう」からである。<sup>24)</sup> 「実践のよどみに直面していないとし

ても、われわれは規範性に出会っている」という考えを金杉が野矢に帰属させようとするのに対して、野矢は、滑らかに相互行為が進まなくなるところに、道標として規範的な規則が立てられると（評者の観点からは正しくも）述べるが、<sup>25)</sup> そのような道標としての規範は典型的な物語は持たない。

私にとつてあなたは、相互行為に際して端的に出会われる他者である。私があなたに出会い、相互行為するとき、野矢であれば、リングと同様に「あなたは私の前に実在する」と言うだろう。しかし私にとつて、あなたは意味づけを与えることなしに実在しているのではなからうか。相互行為がよどみなく進むとき、あなたについて語られることもなく、私にあなたは示されてもいない。そう考えてみたらどうだろうかと思ひながら、本書を読み終わった。

哲学的営みを行う野矢にあなたが出会おうとするならば、あなた自身が野矢の書いたものに直接あたる以外の方法はない。本書はあなたに理解の早道を与えはしない。しかし本書は野矢の議論に対する単なる導入として理解されるべきではない。むしろ本書が示しているのは、哲学的な営みが対話的な営みであることである。その意味で、評者にとつてだけではなく、本書に寄稿するすべての論者にとつて、野矢は思考による働きかけ

を待つ実在であり、私たちが関心を寄せる（実在性を持つ）他者である。各論者は、他者としての野矢の考えるところをそれぞれの思いを込めて眺める。そしてあなたもそうすべきであると誘っている。それに応じて、野矢の思考もまた動いていくはずである。<sup>(27)</sup>

(A5) 判上製、三三三二頁、岩波書店、二〇二四年五月発行、定価五五〇〇円＋税)

- (1) 本書に言及する際は、以下、端的に章・節・ページ番号に言及する。
  - (2) さらに巻頭には、眺望論と相貌論について、そしてウイトゲンシュタイン哲学に対する関係についての解説が置かれており、これらは野矢の議論の良い見取り図をあたえており、非常に参考になる。
  - (3) 鈴木は、眺望地図という無視点的な把握のあり方を批判する(第三章)。評者は、野矢に同意して、指標性の可能性の総体としての空間があることに同意したい。
- 本書評の観点からは、野矢が「無視点的な地図に有視点的な眺望の可能性を描き込んだ」ものと呼ぶものこそ(一一五ページ)、本書のあり方であると考えるのである。
- (4) 野矢茂樹、『心という難問…空間・身体・意味』、講談社、二〇一六年、一〇ページ。
  - (5) 三〇六―三〇七ページ。
  - (6) 三〇四ページ。
  - (7) 概念実在論の拒否については、Jürgen Habermas, „Von Kant zu Hegel: Zu Robert Brandoms Sprachpragmatik“, in *Wahrheit und*

*Richterfertigung: Philosophische Aufsätze* (Frankfurt a.M.: Suhrkamp, 1999), 138―85を参照。

- (8) 三〇六ページ。
  - (9) Ian Hacking, *Representing and Intervening: Introductory Topics in the Philosophy of Natural Science* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983).
  - (10) 第2章、5節。
  - (11) 第2章、6節。
  - (12) 八四ページ。
  - (13) 八四ページ。
- 李は、「人間は相貌に対してもまた受動的なあり方をする」と主張する(一六四ページ)。なぜなら、論理空間は、私たちが行為しながら生きていく行為空間は、さまざまに「習慣によって端的に無視される可能性」があり(一六四ページ)、その意味で私たちの行為は「いわば相貌に導かれ、促される」からである(一六五ページ、圏点省略)。
- 野矢は、実在は非言語的な意味以前のものであることを理由に、行為についての受動性を拒否する(一七二ページ)。
- (14) 八六ページ。
  - (15) 五七ページ。
  - (16) 森永は、このように物語をはみ出しているものとして他者を捉える生き方を個体的と呼び、典型的な物語をはみ出さない仕方では捉える生き方を非個体的と区別するが(第4章、2. 3節)、野矢はその区別に同意する(一四三―一四四ページ)。しかし、評者は野矢に賛成して、個性性を相貌として捉えない。
  - (17) 解説1, 2. 3節。野矢、前掲『心という難問』、二二章。
  - (18) 第1章、5節。
  - (19) 島村は、規則のパラドックスに類比的な意味の問題(野矢の言う「意

味の懐疑論」(二九二ページ)を、相貌についての自己知に訴えて解決できると議論する(第9章)が、それに応える際に野矢は「概念使用の能力の自己知に一人称特権」を認めないと主張する(二九三ページ)。

(20) 第1章、6節。

(21) 五九ページ。

(22) 二六三ページ。

これは、論理空間の他者の理解可能性を否定する高村による議論(第8章)への応答である。

(23)

竹内は、意図の相貌について、それが意図の構成テーゼと両立しないと論じる際に(第7章、4節)、行為の意図に付随する「可能な障害」と調整に関する物語「(野矢茂樹、『哲学・航海日誌』(春秋社、一九九九年、二二四ページを参照)に注目する。しかしこのような物語には、典型性はないように思われる。その意味でこのタイプの物語はプロトタイプとしての役割を持ち得ないように思われる。ちなみに野矢が応答で述べるように、そのような物語は無数にある可能な物語ではない(二三五ページ)。

(24)

野矢、前掲『哲学・航海日誌』、一五七ページ。

(25)

第6章、5. 2節(特に一九五ページ)。圈点省略。

(26)

二〇四ページ。

評者は、この道標の設置が討議的な合意によって行われると考えるが、この点については更なる議論が必要である。

(27)

本稿は、科学研究費補助金(21K04502, 23K03555)および法政大学現代法研究所研究プロジェクト「多元主義的社會」の概念を持つ現代的な哲学的射程)の研究成果の一部である。  
本稿の準備段階において、峰理哉、渡邊一貴の各氏のコメントから多くを学んだ。記して感謝したい。それにもかかわらず残る誤りについ

ては、当然に評者のものである。